

GREEN VEIL

GREEN VEIL · 全六巻完結長編シリーズ

Green Veil 第一巻

秘められた遺産

NANDO CASTROS

公式無料試し読み版 · 序章＋第一章・第二章

GREEN VEIL · 全六巻完結長編シリーズ

Green Veil 第一巻

秘められた遺産

NANDO CASTROS

『Green Veil 第一巻 — 秘められた遺産』公式無料試し読み版（序章・第一章・第二章収録／最終編集監修前の先行プレビュー版）。

Copyright © Nando Castros / Grow-X Co. Tecnologias Ltda. 無断転載・商用複製を禁じます。

公式サイト・公開通知登録：https://greenveil-zeta.vercel.app/?lang=ja#pedido

序章 内側の鍵

雌が戻ってきたとき、水はすでに卵に届いていた。

傾斜した岸を四本の脚で下りた。力の強い後脚で体重を支え、前脚で足場を探す。長い尾が後ろに持ち上がり、斜面で釣り合いを取っていた。細かな鱗に覆われた皮膚が枝をこすり、湿った光沢を残した。背の大きく盛り上がった恐竜だった。頭は体の割に細く、鼻先は前方で広がって硬い縁になっていた。その頭を葉の間に下ろすと、巣が半ば崩れていた。縁の一部は川にさらわれていた。体で葉と土を押し固めた場所には、流れのあとに滑らかな茶色の面が残り、小さな虫たちが足場を探していた。雌は鼻先を近づけた。いちばん近くの卵が水に押されて回り、別の卵に当たって乾いた音を立てた。

谷の上では、低い雲が木々の梢の間にほどけていた。雨は一晩じゅう降り続いていた。木々からは、湿り気によって開かれたものの匂いがした。裂けた樹皮、割れた果実、柔らかくなった木。その内側では、別の生きものたちが働いていた。砂州に隔てられて幾筋かに分かれていた川は、今では谷の通り道をすべて占めていた。枝や葉や動物の死骸を運んでいた。少し先では、二つの岩に挟まった幹が水の流れを曲げ、泥色の泡を湧き上がらせていた。

雌は卵を押し戻し、巣の真ん中へ寄せた。

高地では、なおも水かさが増していた。雌はなじみの岸辺で作業を続けた。くぼみに残る温もりと、鼻先に触れる卵を頼りにしていた。少し高いところから、鼻先で乾いたものを運んできた。囲いを作り終える前に、水はそこを通り抜けた。雌はまた上がり、また葉をむしった。遠くの音に頭を上げたが、音はやみ、雌は作業に戻った。

木のむき出しになった根の下で、小さな哺乳類が巣穴の奥へ退いた。天井は湿っていた。体でいくらか冷たくない場所を探り、ほかの仲間にぶつかり、その一匹の毛に鼻先を埋めた。地面からは、聞き分けるにはあまりに大きな振動が伝わってきた。外で雌がまた動いた。石が岸を転がり落ち、入口を半ばふさいだ。

あの朝と、それを再構成しようとする人間たちとの間には、六千六百万年が隔たっていた。

岸は崩れ、地層はずれ、川の流路そのものが、次々と姿を変える風景の下に消えることになる。雌はもう一つの卵を、先ほどの卵のそばへ押し寄せた。

雌がさらに葉を探している間に、光が変わった。

初めは、太陽から離れた雲の上が明るくなった。それから、木々の影が風では説明のつかない方向へ動いた。動物は動きを止めた。口にはまだ枝をくわえていた。その葉に水滴がぶら下がっていた。谷の周りでも、ほかの生きものたちが、それぞれの動きを止めた。鳥の群れが梢から飛び立ち、隊形も保たずに散っていった。

空を横切っているものは、はるか遠くから来ていた。

その大気に入る前の冷たい空間では、彗星も、移動する無数の天体の一つにすぎないように見えていた。ほかの物質の間を、その軌道に沿って進む物質。しかし、地球へ至るその道筋は選ばれたものだった。その距離を障害としない存在たちが、彗星とともに何かを送り出していた。周囲のほとんどすべてが失われても、生き残るものを。

〈種子〉。

その内には、やがて人間がADÃOとEVAと呼ぶ二つの遺産が運ばれていた。人間の畑を、家を、体を通り抜けてゆく、ある植物の可能性もまた運ばれていた。大麻。いま光が降り注いだ地球には、まだそれらの言葉は一つもなかった。

その理由は、軌道を選んだ者たちのもとに残されていた。

雌は枝を放した。

光は谷底に届き、梢の下へ入り込み、空へ向いた葉の一枚一枚、その葉脈を一瞬あらわにした。小さな哺乳類は仲間たちに身を押しつけた。巣穴の入口で石が震えていた。最初の激しい力は地面を伝わってきた。次の力は木々にぶつかり、その梢を折り曲げた。川が岸に跳ねかかった。雌はくぼみの上に体を伏せた。

そのあと、巣のあった場所を水が通り過ぎた。

長いあいだ、光が以前と同じように戻ることはなかった。

開く前に枯れた葉があった。動物たちは、それまで移動する必要のなかった距離を進み、その果てでも同じ欠乏に出会った。大きな体が倒れた場所には、その肉を残らず食べられる生きものはいなかった。小さな命は隙間に、土の下に、枯れた木の中に耐えていた。飢えは、かつて最も豊かだった場所にまで広がった。枯れた木々のあとに開いた空き地では、長くなる一方の夜ごとに、寒さが地面まで届いた。

岸辺の巣穴も消えた。

別の場所の、別の根の下で、一匹の動物が、一夜をしのぐだけの隠れ場所を見つけた。夜が明けると、また食べものを探しに出た。

〈種子〉は残っていた。その到来から最初の人間までには、何百万年もの時が流れることになる。一つの命の長さでは見て取れないほど小さな変化が、その年月を貫いていた。それらの可能性が、別の体の中で先へ進む条件を見いだすまでに、いくつもの系統が丸ごと途絶えることになる。

水は新たな道を開いた。むき出しの岩は土になった。影のなかったところに森が育ち、寒さの居座るところでは退いた。海が陸を覆い、別の陸から引いていった。残り続けるものの内には、血縁があった。同時に、二度と取り戻せない喪失もあった。

それからずっと後、雌の霊長類が、枝に手の届かない子へ手を伸ばした。

子は今にも折れそうなところに、力いっぱいしがみついていた。母親は、細い枝の分かれ目で自分の体重を支えながら、安全と思える範囲を越えて下りなければならなかった。ようやく手が届いても、子はすぐには前の足場を放さなかった。その指は、手を伸ばさなければならないことと、落ちる怖さの間にこわばっていた。母親は子を自分の腹に引き寄せた。そのあとで枝が折れ、葉から葉へぶつかりながら地面まで落ちていった。

ほかの者たちは、手の動きを見てものの作り方を覚えることになる。食べものを蓄え、傷ついた者のために引き返し、石の縁が切れるようになるまで加工する者も現れる。失われるやり方もあれば、姿を変えて、見ていた者の手に渡るやり方もある。地球の風景はなお幾度も変わることになる。ある出来事を生きた者がいなくなっても、誰かがその物語を残すようになるまでには。

火のそばで、誰かが、すでに死んだ人がどうやって道を見つけたかを語るだろう。聞いていた者は、どこか見せてくれと言うだろう。物語は翌朝へ続いてゆく。その道を探す足の中に。

そして、それらの手が知ることになる植物の中に、日々のどんな使い方によっても尽くされることのない、〈種子〉との関わりを保ったものがあった。

人々は大麻から繊維を取り、種を蓄え、同じように見える葉にも違う匂いがあることを覚えるだろう。一作分の収穫がまるごと、自分の運んでいるものに一度も思いを至らせない人々の手を渡ることもあるだろう。別の体の内では、誰にもすべてを掌握できない条件のもと、その植物との出会いが、耐えがたいほどの深みを開くことになる。そして感じたことを語ろうとするとき、人々は自分たちの言葉にどれほど多くのものが欠けているかを知るだろう。

◆

鍵は扉の内側にあった。

エリアンがそれに目を留めたのは、マーラが、外へ出られるのかと尋ねたからだった。鍵なら、ある。鉄の輪に、すり減った歯。軸は木の扉に寄りかかっていた。廊下を通る者なら誰にでも見える。千三百二十年ごろの、ある春の午後。洗濯物が乾いている中庭と二人の間を隔てるかんぬきは、どこにもなかった。

「出られるよ」と彼は言った。

マーラは待った。

エリアンは扉まで行って開け、廊下を見せた。石灰を塗った壁、床近くの湿った染み、案内を待つ訪問者たちが座る長椅子。奥にはもう一つ扉があり、それも開いていた。籠を抱えた女が通りかかり、二人に挨拶した。

「ほら、見えるだろう？」

「私と一緒に出られるかって聞いたの」

彼はもう少しの間、掛け金に手を置いていた。それから鍵を回さずに扉を閉めた。

マーラはテーブルの上に布包みを置いていた。パンと、家で仕上げた衣服を二着持ってきていた。小さいほうの袖には、まだ糸の端が残っていた。刃物が見つからないとき、彼女が歯で糸を切る、そのやり方をエリアンは知っていた。窓辺で身をかがめ、自分に苛立っている姿を思い浮かべた。奇妙な懐かしさを覚えた。訪れることでしか触れられない暮らしへの懐かしさだった。

「彼女たちと話した」と彼は言った。

「何て？」

「考えてみるって」

「冬にも考えていたわ」

「道が悪かったから」

マーラは床に伸びた日なたの帯を見た。

彼は腰を下ろした。座面は取り替えられ、背もたれも修理されていたが、椅子は、文字の読み方を覚えたころと同じものだった。何年もの間、それは何かが続いている証しに思えた。今では、幼い日の記憶が、その木に、居心地の悪いほどの強さでまとわりついていた。

この家は、まだ小さかった彼を迎え入れてくれた。食べものに困ったことはなかった。熱を出せば世話をしてくれた。植物の名を教えてくれた人がいた。矛盾しているように見える記録をどう比べるか、幾晩もかけて教えてくれた別の人もいた。ここには愛情があった。熱のある額を支えてくれた冷たい指と、彼がベッドから起き上がれたときの、一人の女の大騒ぎするような喜びを、エリアンは覚えていた。この家を牢獄と呼ぶなら、そのあとで、自分の口にした言葉の響きを聞かなければならない。

マーラは包みを開いた。

「大きい部屋は、私のきょうだいが使うことになるの。もう一つの部屋は、まだ使える」

エリアンはパンに触れたが、取らなかった。

「もう決めたんだね」

「いつまでも来ない返事を待たせたまま、自分の人生を置いてはおけないって、それは決めた。私たちのことは、聞きに来たの」

彼女と知り合ったのは、ごくありふれた作業のさなかだった。後になってそこに何かの徴を探そうとすると、かえってその出会いを損なう気がした。マーラは、この家の品物を繕っていた。ある日、テーブルに作業する場所が足りなくなった。エリアンは籠をどけ、中身をほとんど落としてしまった。落ちるものを拾おうとしていると、彼女のひと言に思わず笑った。そのときの彼女は、彼が報告書に書かれるような人間だとは知らな

かった。知ってからも、人が作業をしなければならない、まさにその場所に物を置く彼の癖には、相変わらず腹を立てていた。

次に彼女が来るとき、彼はテーブルを空けておこうとした。マーラは入ってくると、何もない天板を見て、載っていた物をどこへ隠したのかと尋ねた。

「片づけたんだ」

彼女は壁際の櫃を開いた。籠が横倒しになり、彼がせっかく拾い集めたものが、すべて床に散らばった。

マーラがしゃがんだ。エリアンも手伝おうとして、テーブルの縁に額をぶつけた。二人は散らかった物の間に座り込み、廊下の誰かを呼び寄せないよう、声をひそめて笑った。彼女が打ったところに指を当てると、彼は息を止めた。

「まだ痛い？」

痛かったが、彼は首を振った。

マーラが近づいた。初めての口づけは、ちょうどエリアンが立ち上がろうとしたせいで、うまく合わなかった。彼女は袖をつかみ、彼を引き戻した。

そのあと何日も、家具の下に転がり込んでいた小物が見つかった。彼はそれらをテーブルに置いておいた。マーラは、集まった品々を見れば、どこから出てきたものかわかった。

エリアンは中庭を通って彼女を送るようになり、そのうち道まで送るようになった。会話は長くなった。保管役の女の一人が二人を一緒にいるところで見かけ、その夜、彼に、幸せかと尋ねた。エリアンは、そうだと答えた。しばらくの間、彼は気づかなかった。その問いがすでに、別の部屋で交わされる、彼の加わらない別の会話に組み込まれていたことに。

マーラと暮らしたいと申し出ると、記録室へ呼ばれた。

彼女の安全を考えなければならない、と言われた。次には、彼の安全を。その次には、子どもができたら何が起こるかを。エリアンは、何が起こるとわかっているのか、と尋ねた。わからないからこそ、待つべきなのだ、と返された。

マーラは、彼のために作り始めた一着を、持ってこなくなった。布がなくなったのだと言った。なぜ買い足さなかったのか、エリアンは聞かなかった。

マーラが初めて、その話を聞かせてほしいと言ったとき、二人は裏の中庭にいた。

彼女は乾いた茎から繊維をほぐし、下ごしらえで取り残されていた一片を取り除いていた。繕いに使った糸は、その袖には太すぎた。エリアンが別の糸を差し出すと、マーラは指の間で強さを確かめ、どこから来たものか尋ねた。

彼は塀ぎわの植物を指さした。

「これは、昔の収穫で取れたものだよ」

「糸のことを聞いたのよ。なのに、別の何かを聞いたみたいな顔をした」

エリアンは彼女の隣にしゃがんだ。湿った土に葉が一枚貼りついていた。その先が小さな穴にかぶさって曲がっていたので、水が流れるように取り除いた。

「ここでは、すべては一つの〈種子〉から始まったと言うんだ」

マーラは続きを待った。彼は、その言葉に特別な重みがある理由を、誰も尋ねる必要のない部屋で聞くことに慣れていた。その外では、ただ畑についての話の始まりなのかもしれなかった。

教わったとおりに話した。光の尾を引く天体の道筋に乗せられ、はるか遠くから送られてきたもの。最初の人間よりも前の到来。指で、繊維で、匂いで知っているあの植物には、そのとき来たものの一部が宿っていた。

人々は守る務めを受け取っていた。しかし、物語のすべてを受け取ったわけではなかった。

マーラは糸の切れた端を探した。

「誰が見たの？」

「来たところを見られる人間はいなかった」

「じゃあ、誰が話したの？」

エリアンは口を開き、自分が途方もない隔たりを飛び越えていたことに気づいた。出会いの話、教えの話、わかったことを残してきた人々の話があった。一人が別の誰かに伝えた。この家では、必ずしも一致しない証言を比べていた。子どものころ彼は、まだ自分が生きていなかった地球を、誰かがどうして覚えていられるのか、知りたがったことがあった。返ってきた説明はあまりに長く、その言葉よりも、聞き疲れたことのほうをよく覚えていた。

「僕たちに話しかけていた時代があった、と教わった」と彼は答えた。

「送り出した者たちが？」

「同じ者たちだったかどうかは、わからない」

マーラは笑わなかった。そのため彼は、その答えから自分をかばうことなく、答えを抱えていなければならなかった。

彼は、彼らが遠ざかったことを話した。やって来ていた者たちは、来なくなった。人間には、学んだものと失ったものが残された。保管役の女たちも、誰一人として彼らに会ったことはなかった。それでもエリアンの将来を話し合うときには、ときに、外から答えが届いて、自分たちが選ばずに済むかのように話した。

マーラは繊維を持ち上げた。

「それで、袖を繕うようにって、私にこれをくれるのね」

「つまらないことだと思う？」

「袖は長持ちしなきゃいけないと思う」

彼女は布に糸を通した。力がかかって爪のそばの皮膚が引っ張られるのを、エリアンは見た。植物はその衣服の中にあり、それでいて、閉ざされた部屋で彼らが理解しようとするものでもあり続けた。彼はこれまで、その二つのことを、いつも別々の機会に聞いていた。

「〈種子〉そのものじゃないんだ」と彼は植え床を指さして言った。

「そうだとは思っていないわ」

彼は恥ずかしそうに笑った。

「ときどき、僕が思い出さなきゃいけなくなる」

マーラは縫い目を仕上げ、袖を渡して着てみるように言った。布は引きつらなかった。エリアンは満足して腕を曲げ、それからまた植物を見た。長いあいだ、一つの命から次の命へ渡されたものを守るのだと、聞かされてきた。自分自身の生について尋ねると、急がないでほしいと言われた。

その午後、彼はまだ、二つを結びつけることができなかった。家を探し始めたとき、その問いが戻ってきた。

◆

「行きたい」と、今、彼は言った。

マーラは手にしていた布を放した。

「だから、一緒に話し合いに来てほしい」とエリアンは言った。

彼女は深く息を吸った。その申し出は、エリアンの人生が、まるでこの家の所有物であるかのように吟味される場所へ入ることを、彼女に求めていた。だが同時に、返事を最初から最後まで一緒に聞いてほしいと彼が言ったのも、これが初めてだった。

「行くわ」と彼女は言った。

二人の保管役は、午後の食事の前に二人を迎えた。一人は膝がこわばっていて、立ち上がるのにテーブルへ手をつく必要があった。エリアンは、

彼女が落ち着くのを待った。人前でその痛みを話題にせずに手を貸すやり方を、彼は覚えていた。

壁には細い木の板があり、ばらばらの紙葉が広げて留められていた。部屋は古い紙と、蝶番の手入れに使われた油の匂いがした。窓からは、中庭を掃く音が入ってきた。そこには何一つ、何かを禁じる決定のために用意されたようには見えなかった。

エリアンは、書いてきた願いを差し出した。

書き終えるのに二晩かかった。初めの稿では、自分がこの家にどれほど恩を受けているかを、改めて説明した。次の稿では、その半分を削った。事実でなくなったからではない。それらの文が、彼にはまだ堂々と言うことを覚えなければならない事柄について、詫びていたからだった。

マーラと暮らしたい。仕事の一部は続けると申し出た。家のこと、距離、どう生計を立てるかを記した。最後に、子どものころから与えられた食べものが、一生の借りになってはならない、と伝えようとした。何度も書き直したため、その言葉の下で紙が薄くなっていた。

膝の痛む保管役は最後まで読み、もう一人に紙を渡した。

「あなたの置かれた状況に、なぜ慎重さが必要かは、わかっているでしょう」と言った。

エリアンはその言葉を知っていた。希少、統合、遺産。一度、扉の向こうで、混成という言葉を聞いたこともあった。保管役は説明しようとしてくれた。大きくなれば治るのか、と尋ねたのを覚えていた。

「あなたたちが僕に慎重さを求める理由は、わかっています」

もう一人の保管役は、願いを書いた紙を下ろした。

「この部屋にいない人たちにも影響が及ぶかもしれないのよ」

「誰にですか？」

彼女は一般的な言い方で答え始めた。エリアンは遮り、そして自分の無遠慮さを恥じて黙った。マーラは、その沈黙から彼を救い出そうとはしな

かった。

「誰の話をしているのか、知る必要があります」と彼は言った。「僕のせいで危険にさらされる人がいるなら、その危険を理解できなければ」

年長の保管役は、指で膝を押した。

「起こる前から、すべての危険に名前があるわけではないの」

エリアンはマーラを見た。彼女は膝に手を置き、動かさずにいた。そうするために力を使っているのだと、彼にはわかった。

「それなら、どれだけ待てばいいんですか？」

どちらも答えなかった。

通りを荷馬車が通った。音が大きくなり、取りつけの緩い窓ガラスをかすかに揺らし、遠ざかっていった。中庭を掃いていた女が、何か重いものを動かすのを手伝ってほしいと、別の女を呼んだ。

「あなたが送ろうとしている暮らしを、私たちが守れるようになるまで」と年長の保管役は言った。

マーラは身を乗り出した。

「部屋はあります。仕事もあります。私の家族も、私たちが一緒に暮らしたいことを知っています。足りないのは、暮らしじゃありません」

女は、偽りのない悲しみをたたえて彼女を見た。

「あなたは、彼が抱えているものをすべて知っているわけではないのよ」

マーラは顔を赤くした。エリアンはそのしるしを知っていた。あとになって、自分が口にした答えを引き受けなければならなくなる、その直前だった。

「一緒に生きたいと思う人のことは、知っています」と彼女は言った。「知らないことは、本人に聞きます」

保管役は、子孫について話し始めた。

そのとき、エリアンはテーブルの縁から手を離した。

ある午後、マーラは、賑やかな家がいいと言っていた。どんな賑やかさかと彼が尋ねると、わかるまで彼を見つめた。子どもにつけたらひどいだろう名前を出し合って笑い、それから、大胆なことを言ったのが恥ずかしくなって、話すことがなくなった。今、目の前の女は、その未来について、冬の食料を尋ねるときと同じ声で話していた。

年長の保管役は、もう一度願いを書いた紙を見た。

「私たちが守っているのは、一つの部屋だけではないのよ、エリアン」

話が始まる前から、彼には何の話かわかった。〈種子〉、植物、ここに生きる者たちへ届くまで、幾多の体を通ってきたもの。女は低い声で、仰々しさもなく話した。苗の健やかな部分まで切らずに、腐ったところだけを取り除く方法を教えてくれたのは、この人だった。エリアンには、かつての世話がなかったことになったかのように、彼女の話を聞くことはできなかった。

マーラが尋ねた。

「守るために受け取ったものは、この家で終わるものだったんですか？」

若いほうの女が顔を上げた。

「いいえ」

「なら、この家の外でも続いていかなければ」

「あなたは植物の話をしているのよ。同じことのように言うけれど」

マーラはエリアンを見た。自分をここへ招き入れたあとで、自分の体のことを別の誰かに答えさせるとは、彼女は思っていなかった。

彼は違いを知っていた。植物なら植え直せる。収穫の一部が枯れても、別のものが残る。先延ばしにされたこのエリアンの人生を、マーラのところへ運んでくれる別のエリアンはいなかった。だが、まさにそのために、守るという理由だけでは、もはや十分に思えなかった。

「昔の者たちは、人が学べるように遠ざかったと言いますよね」と彼は言った。「僕は、出ていけるようになるために、何を学べばいいんですか？」

年長の女は膝をなでた。

「あの者たちには、遠ざかることができた。危険とともに残ったのは、私たちなの」

その答えに、次の言葉が出なくなった。人間に残された物語が単純なものだと、彼は言い切れなかった。この家で本当の恐怖を見てきた。女たちの喪失は、ただ彼を従わせるために使われるものではなかった。マーラはまだ隣にいた。危険があるというだけで、彼女の代わりに決められるわけではなかった。

エリアンは、願いの中で仕事について記した箇所に戻った。近くに住む必要があるなら、近くに住むという条件については話し合える。一人で通ってはならない道があるなら、どの道なのかを知りたかった。翌日の支度ができるような、具体的な手立てを待っていた。

若い保管役は、指で行をたどった。そのどの行も、もう一人の答えを変えるには足りなかった。

彼は立ち上がった。

「子どもを絶対に持たないとは、約束しません」

若い保管役は紙を折ったが、その仕草が早すぎたかのように、すぐまた開いた。

「そんなことは求めていません」

「子どもができたら何が起こるか、わかるまでは出ていけないと言っているでしょう。どうやってわかるんですか？」

女はもう一人の女を見た。

エリアンは立ったまま待った。脚の後ろにある椅子は、子どものころ、その話は大きくなったら説明すると聞かされながら座っていた、あの椅子

のように思えた。

願いは拒まれた。

結局どういう決定なのかとマーラが尋ねるまで、拒否という言葉は使われなかった。延期だと言った。慎重さだと言った。この家には、その責任は負えないと言った。マーラは、今まさに妨げている人生の責任なら負えるのかと尋ねた。

年長の女は疲れ切って、誰かがそうしなければならないと答えた。

エリアンは紙を手に部屋を出た。

中庭では、日が当たる壁が移っていた。誰かが洗濯物を取り込んでいた。見習いがマーラに気づき、ほつれた縫い目を見てほしいと頼んだ。彼女は別の日にまた来ると言った。エリアンは、紙のしわくちゃになる音がするまで握り締めた。見習いはその手を見て、気まずそうに離れていった。

外へ出る扉の近くで、マーラは立ち止まった。

「今、私と一緒に来られるのよ」

エリアンは外を見た。通りが見えた。樋から水の滴る日陰の一角と、肩に束を担いだ男が見えた。家の前に兵士はいなかった。

だが、生きてこられたのは、すべてここにあるもののおかげだった。食べもの、仕事、自分の経験を理解する人々に会えること、それを説明できない日に受ける世話。この壁の外では、暮らしと、それを支える力を、同時に作らなければならなかった。あまりに長い間、それを保護と呼んできたため、依存を自分の体そのものから見分けるのが難しくなっていた。

「支度をしないと」と彼は言った。

マーラはしばらく目を閉じた。

目を開けても、そこに侮蔑はなかった。そのほうがつらかった。

「支度をして」と彼女は答えた。「でも、ここでされたことを選択と呼ぶように、私に求めないで」

彼女は彼の顔に触れた。エリアンは彼女の額に自分の額を寄せた。髪に通りの匂いがし、外套の布には日なたの温もりが残っていた。それからマーラは離れた。急ぐことなく角まで歩き、彼が次の言葉を形にする前に、姿が見えなくなった。

その夜、若い保管役は、もう一度願いの書かれた紙を読んだ。

ほかの家々へ送る要約には、保護のために外へ出ることが延期された、とだけあった。長いほうの紙には、エリアンの示した条件、危険についての問い、子どもを絶対に持たないとは約束しないという言葉が残されていた。書き直された箇所では、ある言葉を書いた跡が紙を突き破っていた。

女は書き写した記録の末尾に異議を書き加えた。最初の言葉を書く前に、手がためらった。彼女もまた、理解できないものを恐れていた。不用意にさらされたあとで傷ついた人々を見ていた。体が逃げられるよりも速く、名前が広まっていくのを見ていた。目を閉じると、返事を待つマーラと、手をどこへ置けばよいかわからず立っているエリアンが見えた。

一文を最後まで書いた。

要約は翌朝送り出された。異議は、この家に残った。

部屋で、エリアンはマーラの持ってきた服を畳んだ。ほかの服と一緒にしまい、扉を開け、内側にある鍵を見つめていた。

◆

訪ねてきたその日の午後、エリアンと別れたマーラは、影が敷居に届く前に、きょうだいの家へ戻っていた。小さいほうの部屋は開いていた。櫃は壁からどけられ、石灰塗りの壁には、その家具が何年も寄せてあった跡が見えた。床には、朝、彼女が運んできた寝具の包みがあった。

きょうだいが洗面鉢を手に現れた。彼女はマーラの後ろを見て、それから、まだ抱えている包みに目を移した。

「彼は来なかったの？」

マーラは、訪問のあとに残ったパンを置いた。

「今日はね」

きょうだいは、いつかとは尋ねなかった。洗面鉢を台所へ運んでいった。マーラは、自分の気持ちがわかる前からエリアンを弁護せずに済むことに、黙って感謝した。部屋へ入った。窓は最後の手のひら一つ分ほどのところで引っかかった。引くと、木がきしみ、窓台に少し埃が落ちた。

そこにテーブルを置くつもりだった。エリアンの細かな仕事には光が要った。そのことを彼があまりに丁寧に説明したので、マーラはきょうだいを訪ねるたび、光の届く範囲を見るようになっていた。朝は床の石まで、そのあとは壁にだけ。一度にすべてを思い描いた暮らしではなかった。小さな問いから、少しずつできてきたものだった。棚の高さ、濡れた靴を置く場所、一着繕えばいくら受け取るか。

寝具を広げた。縫い残したところを見つけ、縁に刺しておいた針を探した。一瞬、全部しまってしまおうと思った。それから、明るいところへ腰掛けを引き寄せた。

きょうだいが戻ってきたとき、マーラはもう針を動かしていた。

「この部屋は空けておく？」

その問いに、彼女は布を握り締めた。一生を取り置いて、それを忍耐と呼ぶわけにはいかなかった。だからといって、あの家の女たちと同じ手軽さで、エリアンの代わりに答えたくもなかった。

「今のところは」と言った。「でも、彼と話す」

「また？」

マーラはうなずいた。食事の前に手を洗えるように、きょうだいは洗面鉢を近づけた。二人の指には小麦粉がついていた。そのありふれた仕草に、張りつめていたものがほどけた。そこで初めて、保管役たちの前で泣かないために、どれほど力を使っていたかに気づいた。

家では、エリアンが食事のために下りていった。いつもの席はまだ空いていた。皆の知っている彼の分量がよそわれ、誰かが新しい布について尋ね、若者が書き込みを読み解くのを手伝ってほしいと頼んだ。彼は若者に答えた。食べた。拒まれたからといって、感謝が消えたわけではなかった。それゆえに、感謝を、自分にされたことを測る物差しにはできなかった。

それから器を台所へ運んだ。洗い桶のそばにいた女は、彼の手から受け取ろうとした。エリアンは、自分に洗わせてほしいと頼んだ。彼女は驚きながら譲り、布のある場所を教えた。

器の洗い方を覚える必要があったわけではない。何をどれだけ、自分で選んでしているのか。誰かがいつも先回りするために、何をどれだけ覚えずにきたのか。それを知る必要があった。最後の道具を洗い終えるまで、そこにいた。部屋へ戻ると、鍵はまだ内側に下がっていた。

拒まれた願いの前に座った。別の紙の裏に、項目を書き始めた。仕事、食べもの、移動。移動の横にマーラの名を書き、手を止めて消した。彼女は、自分だけで手配できる事柄ではなかった。本人に尋ねるために、そこを空白にしておいた。

廊下は静かになっていった。エリアンは、扉の下から漏れる明かりを隠さずに、作業を続けた。

第一章　残された家

チャドは、シーツを指で握り締めたまま目を覚ました。

息を吸い込み、寝室を見いだした。カーテンの間の細い光、椅子から落ちたＴシャツ、頭上で回る扇風機。心臓はまだ速く打っていた。指を一本ずつほどいた。親指の爪が手のひらに跡を残すほど、布を握っていた。

ベッドの縁に腰を下ろし、裸足で冷たい床を探った。喉を動かせるようになるまで、そうしていた。外では一羽の鳥が、三つの音を繰り返していた。いつも高くなる三つ目の音で、チャドは目を閉じた。

気化器は、ベッド脇の小机の引き出しにあった。明かりをつけずに取り出した。手に収まる小さな重みも、ボタンのそばの傷も知っていた。何時か確かめるより先に、それを探す朝もあった。窓を少し開け、Ｔシャツと下着姿で、そのそばに立ったまま、器具を指の間に持っていた。

舌に大麻の味が残った。下の庭は、まだ濡れていた。葉の長い先端に水滴が一つぶら下がり、葉脈を伝ってくる水を集めながら、ゆっくりと大きくなっていた。チャドはその道筋を目で追った。滴が落ちると、手のひらの真ん中で、ごくかすかな動きを感じた。

手のひらを見た。

爪の跡は、まだそこにあった。

また窓に目を向けた。一瞬、植物までの距離が近すぎるように思えた。指を動かすだけで、葉がたわむ感触に触れられそうだった。同時に、笑いたいという、どうにも場違いな衝動が湧いた。この部屋にはあまりにそぐわず、恥ずかしくなった。喜びの下には、別の何かがあった。深く、形のないものが、喉を締めつけた。

自分が手を伸ばしていたと気づく前に、引っ込めた。

「わかったよ」とつぶやいた。

鎧戸が枠にぶつかった。彼は身を引き、椅子に膝を打った。悪態はするりと出た。小さな痛みのおかげで、部屋の境目を取り戻せた。器具を机に置き、カーテンをもう少し開いた。

光が、ベッドのそばの写真に届いた。

サンディは笑っていた。京都の風が栗色の髪を持ち上げ、額に近い明るい色の毛をあらわにしていた。一房が口元にかかっていた。母は、今にもマイケルを写真の枠の外へ引っ張っていきそうに、その腕をつかんでいた。細い顔に、目尻のしわ。そして、チャドのよく知る、あの首の傾げ方。何かを言い終えたばかりで、相手がそのおかしさに気づくのを待っていた。

マイケルは、まだ真顔でいようとしていた。写真では、こめかみに白いものの混じる短い黒髪が、手ぐしで整えただけのように見えた。日差しが褐色の肌と、くっきりした顎の線を際立たせていた。サンディより幅のある体で、画面の半分近くを占めていたが、二人がどちらへ行くかを決めるのは彼女だった。彼の片手は、腕にかかった妻の指を覆っていた。チャドは、ねじを締めるために自分の手を包んでくれた、その大きさを覚えていた。父はいつも、作業が終わる前に、結局は道具を彼に渡してくれた。

その写真をここに置いたのは、二人が自分を見ていない、数少ない写真の一つだったからだ。

写真立てを手に取った。親指が、マイケルのコートの上に重なるガラスに跡を残した。Tシャツの裾で拭こうとして、脂を広げてしまい、諦めた。

あのとき母は何と言ったのか、聞きたくなった。

撮影した人は写っていなかった。あの旅行のとき、彼自身は家に残っていた。十六歳だった彼には、両親と二週間を過ごすことなど不可能に思わ

せる、何かの用事にのめり込んでいた。あの確信はまだ覚えていた。何の用事だったかは、覚えていなかった。

机に戻す前に、写真立てを一秒ほど胸に当てた。硬い角が胸骨に触れた。

浴室で蛇口を開き、水が冷たくなるのを待った。両手にすくって顔に浴びせた。その衝撃に、洗面台へ肘をついた。まばらなひげから、いくつかの滴が陶器へ落ちた。顔を上げた。

赤毛は片側がつぶれ、もう片側が跳ねていた。額に落ちる一房を押さえようとしたが、ほとんど同じ位置へ戻ってきた。同じく銅色の眉の下で、淡い色の目は縁が赤くなっていた。数日伸びたひげが顎にまだらな影を作っていた。昨日も、剃ろうと思っていたものだった。

二十歳、と、頬についた枕の跡を見ながら思った。サンディなら、しわになったシャツでも伸ばすように、指でそこをなぞっただろう。それから髪のことを何か言っただろう。彼は文句を言っただろう。

顔を拭いたが、タオルは手に持ったままにした。

寝室へ戻ると、ベッドの上で携帯電話が震えていた。イレーネからのメッセージで、財団の提案を読んだかと尋ねていた。その下のカレンダーは二〇〇九年を示していた。チャドは一瞬、もう一度数え直さなければならなかった。事故から三年。マイケルの代わりに彼のところへ届くメッセージ。サンディの名で話し始め、動詞を選ぶために言いよどむ人々。そうして三年が過ぎていた。

イレーネに、今朝読むと書いた。送らなかった。同じことを約束するのは、これで三度目になる。

コンピューターを開いた。

銀行からの通知と広告、返事を催促する二件のメールに混じって、四時二分に届いたメールがあった。件名には、こうあった。

COMからのご招待――道を再び見いだすために

チャドは件名を通り過ぎ、戻ってメッセージを開いた。その略称は知らなかった。

本文は、一画面にすべて収まっていた。

人生の向かう先を見失い、休息さえ安らぎをもたらさなくなるときがあります。私たちCOMは、それが一つの呼びかけの始まりとなりうると考えています。日々の暮らしを立て直し、仲間と出会い、意味のある何かに再び力を尽くす機会です。私たちの活動をお知りになりたければ、明日午前十時にお待ちしております。

そのあとに、フロリアノポリスの中心部にある高層ビルの住所、十一階という案内、そして略された名前があった。P・アダンソン。

最初のお話し合いで、何かをお約束いただく必要はありません。別の日をご希望でしたら、このメールにご返信ください。

彼はもう一度読んだ。パンフレットから借りたような言葉遣いだと思った。休息という言葉に戻るまでは。器具はまだ、写真立ての横の机に置かれていた。彼はそれを引き出しにしまった。シーツを握ってつけた跡が、まだ手のひらに感じられた。

書いた。あなたは誰ですか。

送る前に、差出人のアドレスを開いた。見覚えはなかった。父の古いメールの中でその姓を探し、それからブラウザーで検索した。組織や協議会、式典の写真が出てきた。アダンソンの名は、長い説明文の中に、ほかの人々の名前に交じっていた。チャドは一枚の画像を、顔が四角い粒に崩れるまで拡大した。

またベッドを見た。

あの文章が当てはまる人は、何百人もいるはずだった。それでもチャドは、送信時刻へ戻った。四時二分。自分が何時に夢を見始めたのかは、わからなかった。

問いかけは送らず、消した。

ビルのウェブサイトで電話番号を見つけた。電話に出た女性は住所を確認し、照会してから、翌朝、彼の名で訪問予定が入っていることも確認した。

「誰が予約したんですか？」

「アダンソン様の事務所です」

「僕は何も予約していません」

女性は待った。

チャドは画面の名前を見た。

「そのままにしておいてください」と言った。

電話を切って、自分が椅子から立ち上がっていたことに気づいた。

階段からジョアナの声がした。

「チャド？　下りてきてくれる？」

彼はすぐには返事をしなかった。

「何かあった？」

「台所になら、あったわ」

床には鍋が並び、戸棚の扉が壁に立てかけてあった。ジョアナはタオルの上に膝をつき、ブラウスの袖を肘の上まで留めていた。丸い顔で、黒っぽい髪を高い位置で結っている。この時間の彼女は、目だけが、体のほかの部分より先に目を覚ましたように見えた。

水が戸棚の中を流れたのだった。テーブルには、サンディの料理ノートが載っていた。

チャドは急いで手に取った。

「ゆっくり。ページがくっついているから」

指の下で表紙がたわんだ。インクが向かいのページに影を残したところで開いた。言葉を読み取るより先に、筆跡がわかった。

砂糖を減らす。マイケルは気づかなかった。

マイケルは気づいていた。二匙目を口にした父の、芝居がかった間。そして、笑いを隠すために、引き出しで何かを探すふりをした母を覚えていた。

チャドは二枚のページを離そうとした。小さな紙片が剥がれた。

「くそ」

ジョアナは彼の手に自分の手を重ねた。

「ゆっくりって言ったでしょう」

彼はページから手を離した。足元に水があった。きれいなタオルを取り、作業台に広げ、その上にノートを開いて寝かせた。その動作にはひどく注意が要り、隣の青い器に気づいたのは、それが済んでからだった。細く暗い修理の線が、縁を横切っていた。

「これもあそこにあったの？」

「そっちは先に出したの」

サンディは、その器を捨てようとしなかった。マイケルは、そんな接着剤ではもたないと、午後じゅう言っていた。最初の夕食では、その器を使うのを断った。翌晩、何の言葉も添えられず、また彼の前に置かれた。それからは、使えるときにはいつも、同じ器を使っていた。

「ありがとう」とチャドは言った。

ジョアナは床のタオルを拾い上げた。

「ダヴィが十一時に見に来るわ。いる？」

「いるよ」

彼女は、彼が電話をしまうまで待った。

「その前に、何か食べなさい」

「冷蔵庫に行く途中で倒れるみたいな言い方だね」

「そこまでの道が滑るの。余計に危なくしないで」

彼は鼻で小さく笑った。パンを一つ取り、半分を手に残したまま、ノートを二階へ運んだ。寝室の日の当たる机を空けた。大事なものかどうかまだ決めていないために取っておいた紙を、脇へ寄せた。ベッド脇の机では、サンディとマイケルが写真の外へ笑いかけていた。

ページを広げている間、メッセージが見えないように、コンピューターの向きを変えた。

◆

ダヴィは、一歩ごとに膝へぶつかる工具箱を提げて来た。痩せていて、髪はほとんど刈り上げてあり、顎に新しい切り傷があった。チャドは台所へ案内し、家のこの部分の水をどこで止めるのかわからないことを詫びた。

「お父さんは知っていたよ」と男は言い、そのまま箱を開け続けた。

チャドは続きを待った。続きはなかった。

ダヴィが木の部分を調べている間に、彼は電話を手に取った。イレーネのメッセージには、まだ返事をしていなかった。話せる、と送った。

ほとんどすぐに、彼女から電話がかかってきた。

「おはよう」と彼女は言った。「読んだ？」

「まだ読んでいるところ」

「何ページ？」

チャドは短く笑ってしまった。

「これ、試験？」

「明日のことよ」

イレーネは、両親の作った財団を運営していた。鼻の低い位置に眼鏡をかけ、彼に腹を立てる前に数字を確かめている姿が浮かんだ。電話越しにキーボードの音がし、それからドアの閉まる音がした。

彼女から届いたファイルを開いた。財団が支援する菜園の記録をまとめ、職員たちが各地区を訪れる回数を減らすための提案だった。彼は最初の段落に質問を書きつけたところで、読むのを止めていた。

「職員は現場に残す」と言った。「差額は僕が出す」

「それで、誰が訪問するの？　各地区を回り切れなくなっているから、職員たちが変更を求めたのよ」

「人を増やせばいい」

「そうかもしれない。でも、実際にその仕事をする人の話を聞かなければ。疲れ切っている人がいるの、チャド。会議は明日、十時半よ」

彼はもう一度提案書を見た。職員の名前が載っているページにさえ、まだ達していなかった。

別のウィンドウで開いている、アダンソンのメールを見た。

「もっと早くできない？」

「ほかの人たちは十時半なら出られるの。あなたも、出席すると言ったときは出られたでしょう」

台所からダヴィが呼んだ。チャドは二人に少し待ってほしいと頼んだが、どちらも黙っては待たなかった。イレーネが電話を遠ざけ、誰かに返事をする声がした。ダヴィは戸棚を測りながら、声に出して数字を言っていた。チャドはコンピューターと戸口の間に立ち、どちらにも行けなかった。

「チャド？」とイレーネが戻ってきた。「あなたが来て自分で支えない意見を、私が代わりに守ることはできないわ」

彼は企画書に添付された写真まで画面を送った。サンディが二つの畝の横に立ち、写真の外の何かを指し示していた。その訪問を思い出した。地面に座れない人もいるからと、母は腰掛けを求めたのだった。マイケルが、誰に頼まれたのかと尋ねると、膝が痛くなるのに、誰かに頼む必要はないでしょう、と彼女は答えた。

その話なら、会議でできた。話す間、自分の手をどこへ置くかまでわかっていた。

「明日の朝まで待って」と頼んだ。

イレーネは息を吐いた。

「九時まで。それを過ぎたら、議題は今のままにするわ」

ダヴィは部品を交換する必要があり、明後日また来ることになった。何時がいいかと尋ねられ、チャドは、いつでもと答えた。戸口を通りかかったジョアナが立ち止まった。

「午後は、私はいられないわ」

彼女が行きたがっていた催しのことを思い出した。一度ならず聞かされていたことだった。

「午前に」と訂正した。「午前なら僕がいる」

ジョアナはまた歩き出した。チャドは、彼女が家事用の作業場へ消えるまで目で追った。メールのことを話したくなった。代わりに、部品はいくらするのかとダヴィに尋ねた。

◆

午後は、財団のファイルとアダンソンの姓を行き来して過ごした。式典の写真には、よくマイケルに連絡してきた人々がいた。父は、そのどれにも見当たらなかった。それでも書斎へ入ると、イレーネの提案書に戻るより先に、家族のフォルダーを開いた。

開けるやりとりの中から、その姓を探した。検索が事故の書類に及んでも、それを除外しなかった。あの招待を墜落と結びつける理由はなかった。自分の人生で何が変わったのかを理解しようとすると、いつもそこへ行き着く癖があった。報告書は日付、航空機、場所から始まっていた。見出しの順番も略号も、拡大するのを避けている写真も知っていた。

姓を検索した。該当なし。

二〇〇六年、十七歳の彼は、両親を返してくれない一つ一つの言葉に腹を立てていた。今はその同じページをたどり、見落とした何かを探していた。二度、最初に戻った。三度目にはファイルを閉じた。

低い本棚には、木の写真立てに入った、もう一枚の小さな写真があった。メリーは写真の外の誰かを見ていた。結い上げた髪から、黒っぽい毛がこぼれていた。二人とも子どもを持つことを考えるずっと前から友人だったのだと、サンディは言っていた。

チャドは、その女性が自分を産んだ人だと知って育った。出産のときに亡くなったことも知っていた。幼いころ、自分のせいだったのかと尋ねたことがある。サンディは、彼が持っていたおもちゃを床に落としてしまうほど素早く、膝へ抱き上げた。

答えのすべてよりも、その抱擁の強さを覚えていた。

しばらくの間、メリーの声を想像しようとした。どんな声も、しまいにはサンディの声に似てしまい、それが腹立たしかった。そのうち大きくなり、別の問いを持ち、そのいくつかは先延ばしにすることを覚えた。写真の中の母は、今の彼とさほど変わらない年齢のままだった。

写真立てを手に取り、誰かの親指ですり減った縁を眺め、元の場所へ戻した。

メールに戻った。そこには、マイケル、サンディ、メリーについて何一つ書かれていなかった。

電話では、家族の弁護士の番号を開いていた。かければ済むことだった。知らない組織から招待が届き、自分の財団の会議と同じ時間に行くことにした、と説明するところを想像した。次に来る問いは、もう聞こえるようだった。そこで何が見つかると思っているのか。自分を滑稽に感じずに口にできる答えは、まだなかった。

画面を消した。

夕食前に、訪問回数を減らすことへの反対意見をイレーネへ送った。職員を増やす案を検討すべきだと書き、その文を読み返して、彼女の求めた話し合いには、まだ応えていないことに気づいた。朝に解決することにした。

台所では、作業台のそばに立ったまま、青い器で食べた。高層ビルの住所を紙に書き、階と時刻を添えた。折ってジョアナ宛ての封筒に入れた。夕方の終わりまでに戻らなければ、彼に電話すること。出なければ、家族の事務所へ。

封筒を器の隣に置いた。

◆

あまり眠れなかった。再び目を覚ますと、引き出しは閉めたまま、まっすぐシャワーへ向かった。車を運転する必要があった。

九時六分、十時二十分の音声テストに出るのかと、イレーネがメッセージを送ってきた。チャドは片手を衣装だんすの取っ手にかけて、それを読んだ。高層ビルへ行くために選んだ服が、ベッドの上にあった。

別のウィンドウでは、メールがまだ、別の日も可能だと告げていた。返事をするだけでよかった。チャドは来週を希望すると書き、しばらくその言葉を見つめていた。

来週になれば、また先に片づけるべき何かを見つけるだろう。何か月も自分に言い聞かせてきたことだった。今それを持ち出しているのは、ろくに読んでもいない提案を説明するために、部屋へ入りたくなかったからかもしれない。財団の会議は、始まる前から彼に仕事を課していた。あのビルは、まだ何ででもありえた。

下書きを消した。

彼女に電話した。

「行けなくなった」

短い沈黙があった。

「何かあったの？」

「片づけなきゃいけない用がある」

「何の用？」

日に当てて開いてある料理ノートを見た。

「個人的なこと」

イレーネは、それ以上聞かなかった。

「反対意見は、そのまま？」

反対を取り下げなければ、イレーネは彼抜きで、それを擁護しなければならない。

ベッドの縁に腰を下ろした。

「取り下げて」と言った。「提案のとおりに進めていい」

「訪問が定期的なものではなくなると、わかっているのね？」

「わかっている」

「書面で送って」

彼は送った。スニーカーの紐を結び終わるより先に、イレーネから受領の返事が届いた。

下りると、ジョアナが作業台を拭いていた。器はもう洗われており、封筒はそれに立てかけてあった。

「長くかかる？」

「わからない」

「住所を置いていったのね」

「念のため」

彼女は目を上げた。

チャドは、何も心配ない、と言いかけた。代わりに鍵を取った。

「明日は僕がダヴィの相手をするから」と念を押した。「あの催しに行っていいよ」

「わかっているわ。書き留めてある」

彼は口を開き、閉じた。ジョアナは、もう乾いているところを、また布で拭いた。

戸口で、チャドは時刻を確かめた。九時二十分。庭の日陰には、まだ湿り気が残っていた。通り過ぎるとき、葉が前腕をかすめた。彼は、速すぎるほどの勢いで振り向いた。

後ろで、植物が揺れ続けていた。

第二章　招待

トンネルの中で、チャドはラジオを消した。

ボタンを押しても、声は一秒ほど残り、エンジン音の間に紛れて消えた。前では、バスの赤い尾灯がガラスを染めていた。車間を空け、シートに頭を預けて、車の列が動くのを待った。家を出たのは九時二十分。あと二十六分。地図では一本の線にすぎないデプターダ・アントニエタ・デ・バロス・トンネルも、中に入れば、朝のすべてが収まってしまう。

助手席で電話が震えた。

アダンソンからではなかった。財団の音声テストを知らせる自動メッセージだった。チャドは電話を伏せた。イレーネにはもう伝えてある。彼の席が空いていても、探す必要はない。

ジョアナが封筒をいつ開けるか決めるところを考えた。思慮ある備えでもするように指示を書き、その指示に従う時を決める仕事は、彼女に残してきた。電話したくなった。車の列が進んだ。彼はバスのあとについて、トンネルを出た。

建物の間に湾が見えた。日差しのせいでまだまともに見られない、白っぽい水面の一角だった。チャドは後部座席からこの道を知っていた。マイケルが話を中断して通りの何かを指さす、いつもの場所も知っていた。先に話を終わらせてほしいとせがんだ苛立ちも覚えていた。その朝は駐車場の入口を間違え、街区を一周しなければならなかった。

警備員が名前を確かめた。遮断棒が上がった。

ビルのロビーでは、一人の女性が段ボール箱を腰に押し当て、電話で言い争っていた。チャドは後ろで待ちながら、言葉を変えて繰り返される同じ内容を聞いていた。自分はここにいる。書類もここにある。担当者に下

りてきてもらわなければ。自分の番になると、会いに来た男の名を告げた。

「ピーター・アダンソンですね」と受付の女性が続けた。

彼女はカードを印刷した。小さな写真には、何か別のことを尋ねかけて唇の開いた彼が写っていた。

「十一階です」

チャドは財布をしまった。エレベーターの鏡を見ながら、襟元の跡を親指でこすり取ろうとした。髪は変な形に乾いていた。着く前に諦めた。

助手の女性は、ロゴのない廊下へ彼を案内した。閉じた扉が二つ、空の会議室、帯状の光の下に植物。チャドは道すがら扉を数えた。女性が最後の扉を開けると、窓辺の男が、上着の裾が体から離れるほど素早く振り向いた。

「チャド」

呼びかけだけが、しばらくその場に残った。

ピーターの栗色の髪は、両側が銀色になっていた。口の両脇から、深い線が下りていた。シャツのいちばん上のボタンは開いていた。彼には、居心地の悪い親しみがあった。顔が動くともう少しで思い当たりそうになり、静止すると見失う、何かがあった。

男は手を差し出した。

「あのメールを送ったのは、あなたですか？」

ピーターは手を引いた。

「私だ」

「ああいう招待は、どんな人に送るんです？」

助手が出ていった。ピーターはその動きを目で追い、扉が閉まるのを待った。

「私たちの活動を知りたいかもしれない人に。あれはCOMを紹介するメッセージで、君を評価したものではない」

「受け取る人のことを、ずいぶん知っているように見えますけど」

「多くの人が経験することを書いている。喪失、行き先の見えなさ、つらい夜。それを神の呼びかけと呼ぶ人もいれば、ただ話せる相手を必要としている人もいる。ここへ来るために、私たちの説明を受け入れる必要はない」

チャドは彼の顔を見つめた。その答えは、メッセージの重みを小さくした。ほっとすると同時に、一晩じゅうそれを考えていた自分が、少し滑稽に思えた。

「それじゃ、僕がなぜ来たかは知らないんですね」

ピーターはすぐには答えなかった。チャドは扉のほうへ向いたが、男がまた口を開いた。

「マイケルを知っていた。サンディも。最後の旅行について、君の手に届いていないやりとりの記録がある」

チャドは扉を開けた。廊下の向こうで、助手が顔を上げた。

彼女が仕事に戻るまで、ドアノブを握っていた。それから扉を閉め、再びピーターを見た。

「報告書のコピーがまた一つ増えるだけなら、帰ります」

男は机の上のリモコンを取った。壁に、地上にある航空機の写真が現れた。扉にタラップが寄せてあった。チャドはその色も、窓の並び方も知っていた。この三年間、彼にとって飛行機は、ねじ曲がった金属の写真の中にあった。壊れていない姿を見ると目まいがし、椅子に手をついて隠さなければならなかった。

「当日の写真ですか？」

「最後の旅行のものだ。業務を請け負ったところから届いた。出所は渡す」

チャドは近づいた。降着装置のそばに男が二人いた。どちらもカメラを見ていなかった。開いた扉の暗がりにサンディを探し、やがてそこは、ただの暗がりになった。

「墜落について何かわかったんですか？」

ピーターはリモコンを下ろした。

「別の原因を示す証拠はない」

空調がぱちりと音を立てた。チャドは画面を見続けた。

「招待には、人生を立て直すと書いてありました」

「失ったものを返す、とは書いていない」

「それで、こんなふうに見せるんですか？」

「先に尋ねるべきだった」

彼は勢いよく振り向いた。椅子が床をこすった。

「消してください」

ピーターがボタンを押した。飛行機は消え、広い暗い壁が残った。

チャドはサイドボードへ行き、コップを取って水を注いだ。水差しが縁に二度ぶつかった。一口飲み、もう一口飲んだ。後ろで、ピーターが椅子を机から引く音がした。

「君に渡せるものから始めるべきだと思った」と男は言った。

「何を見たいか、僕に聞くところから始めてもよかったでしょう」

「そうだ。記録は君のものだ。コピーを用意できる。読みたいときに読めばいい」

「まず、そこに何があるのか話してください」

ピーターはリモコンを机に置いた。チャドはコップを握り締めて待った。写真は、見たいかどうか選ぶ前に、彼に襲いかかった。今、二人の前にあるフォルダーは閉じていた。持ち帰ることはできる。答えてくれる相手がいるうちに、ここで尋ねることもできる。

男の引いた椅子に座った。

「二人が生きていたころの話をしてください」

ピーターはフォルダーを手元へ引き寄せたが、すぐには開かなかった。留め具を外そうとする指の、小さな力みがチャドには見えた。

最初の紙は会計報告だった。輸送、整備、資材。下部にマイケルの署名があり、その上で日付を訂正し、さらにもう一度訂正していた。チャドは余白を親指でなぞった。

「いつもこうだった」とつぶやいた。

「何が？」

「数字を直そうとして、余計にひどくするんです」

ピーターは、その二度の書き直しに今初めて気づいたように、紙を見た。

「別の用紙を送ると、無駄遣いだと文句を言われた」

証拠とするには小さすぎて、傷つくには十分なほど正確な思い出だった。

次のページには、環境関連の研究所について書かれていた。手紙、二件の会議記録、写真。チャドはゆっくり並べた。カップでいっぱいのテーブルを前に、人さし指を立てたサンディが横向きに写っていた。マイケルは手に眼鏡を持っていた。二人は議論の最中に見えた。笑うどころではない二人を見つけたことに、途方もなくほっとした。

「何を言っていたんですか？」

ピーターは身をかがめて見た。

「八人いるのに、椅子が六脚しか運ばれてこなかった、と」

チャドは写真の端を見た。ほとんど枠から切れかかったところに、女性が一人立っていた。

「でしょうね」

「始めるように言われていたんだ。サンディは始めなかった」

ピーターは写真の角を持って向きを変え、光の反射を避けた。チャドは椅子を引き寄せた。脚が敷物に引っかかり、持ち上げなければ机に近づけなかった。

「母は立ったままだったんですか？」

「ほとんどみんながね。彼女に倣って。私はもう座っていた」

チャドは写真の端を見た。マイケルの後ろに、椅子の一部だけが写っていた。

「あなたはどこに？」

ピーターは写真の外を指した。

「ここだ。残りの椅子が来るまでに始めてもいいと思ったんだ」

「それで、母は？」

「立っている人たちも話を聞く必要があるのか、と聞いた」

チャドは鼻から息を漏らした。

「わかっていて聞くんです」

「私は、あると答えた」

ピーターは写真に向かって微笑んだ。チャドの指先は、母にいちばん近いカップの上にあった。その手が全部見えるように、指をどけた。

「すぐに持ってくると言われた」とピーターは続けた。「君のお父さんは、間を持たせるために、なんでもない話を始めた。彼女はじっと彼を見ていた」

「父がやめるまで」

「やめなかったよ。袖についている糸を取ってくれと言った。そんな糸はついていなかったんだが」

チャドは目を上げた。

食卓でサンディの機嫌が悪くなると、マイケルはよくそれをやった。自分の肩を指し、彼女が近づくのを待って、糸くずを取ろうと伸ばされた手にキスしようとする。ときには、はたかれた。チャドは見飽きてしまい、先に言うようになっていた。うまくいかないよ、父さん。

「取ろうとしたんですか？」

ピーターは笑みを浮かべたまま、首を横に振った。

「椅子を探すのを手伝ってきなさいと言われていた」

チャドの笑い声は、この執務室には大きすぎた。口を開けたまま、ふと笑いが止まった。ピーターが彼を見て、その笑みが変わった。チャドは急いでうつむき、サンディの手に視線を戻した。

「家では引っかかっていたんです」

「そうなのか？」

話してしまった自分に腹が立った。ピーターは顔をまっすぐ彼に向け、続きを待っていた。チャドは机の下で片脚を伸ばし、背もたれに背中が触れるまで身を引いた。

「そのあと、二脚とも来たんですか？」と尋ねた。

「先に一脚来た。ほかより低くてね。マイケルが座ってみると、膝がこの辺まで来た」

ピーターは胸を指した。その仕草は、きちんとアイロンのかかったシャツや、傷ひとつない机にそぐわなかった。

「そんなに大柄じゃなかったですよ」

「あの椅子に座ると、そうだったんだ」

チャドはまた写真を見た。父は眼鏡を持ち、開いた片方のつるを手首にかけていた。低い椅子に座り、まるでサンディがその椅子を作ったかのように、彼女に文句を言っている姿が浮かんだ。

「母は笑っていましたか？」

「ずいぶんね。でも、小さな声で。マイケルが、自分の顔に何かついているのかと聞いた。彼女は、おでこしか見えないと答えた」

チャドは写真を机に置いた。口を開くと、また笑いがこぼれた。今度は短かった。鼻の下を手でぬぐった。

ピーターは写真を見つめたままだった。片手はフォルダーの上で止まっていた。親指だけを動かし、留め具をこすっていた。

ピーターは、しばらくしてからまた口を開いた。

「ようやく椅子が届いたときには、最初に何を話し合うはずだったのか、もう忘れていた。マイケルは、さぞ大事なことだったんだろうと言った」

「忘れたことには、なんでもそう言っていました」

ピーターはうなずき、書類に戻った。彼が最初の一枚を引き寄せる前に、チャドはその上に手を置いた。

「待ってください。この写真では、母はまだ立っています」

「その前に撮ったんだ」

「じゃあ、どうして父は眼鏡を外したんですか？」

ピーターは写真を顔に近づけた。

「覚えていない」

マイケルは笑った直後だったのだろうか。サンディは彼に話しかけていたのか、それとも端に写っている女性にか。チャドは知りたかった。

「ひょっとしたら、あのとき……」

ピーターは言葉を切った。チャドは顔を上げ、待った。

「やはり覚えていない」と男は言った。

チャドはうなずいた。写真を両端から持った。母の鼻の脇には、深いしわが刻まれていた。家族写真では、カメラに気づくまでしか続かないよう

な、何かに集中した顔だった。ここでは、撮られていることさえ知らない。午前中ずっと見ていられそうだった。

「母は、椅子を引いてもらうのが好きじゃなかった」と、写真を見たまま言った。「レストランで父がやろうとするんです。母がもう座りかけているときもありました」

ピーターは笑った。低い声は、終わりのところで途切れた。

「目に浮かぶよ」

チャドは窓を見た。今いる場所からは、二つの建物が接するところと、わずかな空が見えた。家では、サンディは皿を持ったまま、足で椅子を引いた。木が床をこすり、料理が滑り落ちそうになり、チャドは番組がもうすぐ終わるから待ってほしいと言った。彼女が一人で食べに行ったあと、テレビはいつも、それまでほど面白くなくなった。

「その日は、いい日だったんですか？」と尋ねた。

ピーターが答えるまでの間は、尋ねたことを後悔するほど長かった。

「ああ。椅子がそろってからはね。二人は私より楽しんでいたと思う」

どんな表情をするか選ぶより先に、チャドの顔がゆがんだ。写真を机に戻した。ピーターは書類を分け続けていたが、その手つきは前ほど正確ではなかった。一枚を別の紙に重ねたままにし、目の前にある添付書類を探した。

「もっと早く、これを君に見せたかった」

「郵便で送ることもできたでしょう」

ピーターの手が止まった。

「そうだな」

チャドは別の写真を手に取った。

温室の中で、マイケルがトレーを抱えていた。片方の袖だけが、もう片方より高くまくられていた。重みのために両肘を外へ張り、目をほとんど

閉じて笑っていた。トレーの側面にはひびがあった。チャドは写真を顔に近づけた。

「誰が撮ったんですか？」

「わからない。訪問したときの写真に、この一枚も入っていた」

「あなたもそこに？」

「その朝はいなかった」

チャドはピーターを見た。自分が落胆したことに驚いていた。あの写真の外にあるものを、誰かに補ってほしかった。

男はフォルダーの最後の折り返しを開き、名前が手書きされたカードを取り出した。

「ヘルガはその研究所に勤めている。君のお父さんと一緒に働いていた。知っているかもしれない」

チャドは名前と電話番号、住所を読んだ。その下には、プロジェクトの古い番号があった。ここに来て初めて、ピーターから差し出されたものが、この部屋の外へと通じていた。

「あなたが僕を呼んだことは、知っていますか？」

「君のことは、彼女に話していない」

チャドはカードをシャツのポケットにしまった。

「写真を持って帰りたい」

「君のために取っておいたんだ」

返事は早すぎた。ピーターは写真の縁に指を置き、チャドのほうへ寄せた。そして、チャドが頼まなくても済むうちに、指を離した。

チャドはサンディの写真を、もう一枚のそばに寄せた。

「これも」

ピーターはフォルダーから手を離した。

「ああ」

折れた角が、温室の写真に引っかかりそうになっていた。チャドは慎重に伸ばした。ピーターが手を差し出すと、その指が届く前に、チャドは二枚とも自分のコップのそばへ引き寄せた。

「水が」とピーターは言った。

コップの表面を、水滴が一つ伝っていた。チャドはコップを遠ざけ、乾いた場所に写真を置いた。二枚の間には白い余白があるのに、父の袖がサンディの腕に触れそうに見えた。

ピーターはその動きを目で追った。チャドは、もう一つ話を聞こうかと思った。ヘルガのカードはもうもらったし、この写真も持ち帰れる。それでも、もう一度椅子を机に近づけた。

二人はしばらく、笑っているマイケルを前に座っていた。

机の電話が鳴った。ピーターは音を止めた。廊下では誰かが助手を探していて、声がガラス越しに聞こえた。チャドはその朝、初めて空腹を感じた。

「何の仕事をしているんですか？」

ピーターは背もたれに身を預けた。その問いには、いくらか気楽に答えられるようだった。

「保全と研究のためのネットワークだ。無造作に流通させるわけにはいかない記録や資料、物品を保管している。公開されているプロジェクトもある。今見ているものには、君のご両親が参加していた」

「ほかのものは？」

「アクセスを制限している」

「あなたが？」

「私を含めて、何人かで」

チャドは会計報告を手元に引き寄せた。父は、ドアに看板を出す気さえない何かのために、修理や輸送、設備の代金を払っていた。

「名前は？」

「道徳秩序の会だ」

チャドは顔を上げた。

「本気で言っているんですか？」

「COMと呼んでいる」

「決める前に、声に出してみました？」

ピーターは口元に手をやった。今度は、かすかに笑みが浮かびかけた。

「昔からの名前なんだ」

「ひどい名前ほど、そうですよね」

チャドが署名を指すと、その笑みは消えた。

「僕の財団も、その一部なんですか？」

「いや。マイケルは財団とは別に活動へ資金を出していたし、提携を通じて支援したものもある。君の財団には理事会も、職員も、独自の活動もある。イレーネが運営しているのは、事業計画に載っているものだ」

「イレーネを知っているんですね」

「マイケルと仕事をする中で知り合った」

チャドはポケットの電話に目を落とした。メッセージを開き、九時六分にやり取りを終えたときと同じ世界に、彼女がまだいるのか確かめたかった。

「父は全部知っていたんですか？」

ピーターはすぐには答えなかった。

「私が知っていることを全部ではない。自分が関わるプロジェクトについては知っていた」

「賛成していたんですか？」

「ときにはね。君のお父さんは、反対するとき、言葉を惜しむ人ではなかった」

「お金は惜しんでいましたけど」

「資金を引き揚げることもあった」

その返事で、チャドが組み立てかけていたつながりが崩れた。資金、秘密、飛行機。壁から消えた写真のほうへ、また目を向けた。

ピーターは彼の視線を追った。

「あの事故を罰だったとするようなものは、何も持っていないよ、チャド」

「そんなことは言っていません」

「わかっている」

見抜かれたことが嫌だった。この会話に飛行機を持ち込んだのはピーターだ。今は何もかもが脅しに思えた。

「なら、もう飛行機のことを持ち出さないでください」

「わかった」

書類の中には、栽培の写真もあった。名前も知らない植物に交じって、見覚えのある葉をチャドは見分けた。作業台に広げられた緑色の布、表示のある容器、干してある手袋が見えた。

「マリファナ？」

「大麻も仕事の一部だ」

「僕のことも、それは知っているんでしょうね」

ピーターは、意味がわからないふりをしなかった。

「使っていることは知っている」

チャドは写真を押しやった。

「始めたのは、あとです。二人がいなくなってから」

「そうか」

「父から覚えたんじゃありません」

「そうだとは言っていない」

男の抑えた態度が腹立たしかった。いっそ責められたほうが、言い返せるだけましだった。ピーターは窓へ行き、ブラインドを調節した。チャドの顔を横切っていた日差しが、床へ移った。

礼の言葉より先に、楽になったと感じた。礼は言わなかった。

「どうして、光が気になっているとわかったんですか？」

「私を見るとき、左目を閉じているから」

チャドは、まだそうしていることに気づいた。両目を開いた。

ピーターは再び座った。今度は机の脇の椅子だった。机全体が二人を隔てることはなくなった。それ以上は近づかなかった。

「君に起きていることを理解する助けになる研究もある。真剣に向き合っている人たちを知っている」

「僕の医者も、真剣に向き合っています」

「それはいい」

「そういう言い方はやめてください」

ピーターは両手を膝に置いた。爪が一つ、短く切られすぎていて、その縁の皮膚が赤くなっていた。

「その場所をどう思うか決める前に、まず知ってほしいんだ」

チャドは写真の植物を見た。大麻を使ったあと、庭の大きさは変わらないのに、その尺度だけが変わるように感じることがあった。喉が渇き、腹が減り、音楽が初めて聴くもののように聞こえるだけで、ほかには何も起きないときもあった。何かが欠けるまで、自分がどんな体験を求めているのか、いつもわからなかった。

「ときどき、見えるんです……」と言いかけた。

ピーターがわずかに顔を上げた。

その動き、すぐに向けられた注意に、チャドは言葉を続けた。

「見えるんじゃない。下にある植物が、ここにあるような気がするんです」

腿の上で手を開いた。葉の上の水滴の記憶が、喜びを伴う鮮やかさで戻ってきた。スーツ姿の男の前では、それが気恥ずかしかった。

ピーターはその手を見た。

チャドは手を閉じた。

「忘れてください」

「今、説明しなくてもいい」

机の上で、電話がまた振動した。ピーターは着信を拒否した。チャドはすでに、話すつもりだった以上のことを話していた。そのあとの沈黙は、続きを待つためのものに思えた。

「使えそうなことを僕が言うまで、聞き続けるつもりですか？」

男は立ち上がった。今度は、ドアをノックした助手に応じるためだった。助手は小声で、もう二十分も待たせていると伝えた。ピーターは時計を見た。

「こちらから折り返す」

「時刻を伝えないといけません」

一瞬、男の顔を苛立ちがよぎるのをチャドは見た。ピーターはもう一度机と、散らばった書類を見て、正午に電話すると言った。助手はうなずいて出ていった。

戻ってくるとき、ピーターはドアを少し開けたままにした。

「訓練をしに来てほしい。私と話すだけではなく。私の話に頼らず、自分でできるようになることがある」

「それで、あなたには何の得が？」

「君を近くに置ける」

男は、長い説明をするより先に、そう言った。自分でも気づいたようだったが、取り消さなかった。

チャドは彼を見つめた。

「なぜ？」

「君について、財団について、問い合わせがあったという知らせを受けた。私より先に君に近づけたくない思惑がある」

「誰の？」

ピーターは息を吸った。断るための準備だと、チャドにはわかった。

「何をしたか示せないうちは、名前は出さない」

「じゃあ、先に僕に近づいておいて、誰を怖がるべきかはあとで教えるわけですか」

「そうだ」

「認めれば済むみたいに、いちいちうなずくのはやめてください」

ピーターは、音がするほど強く椅子を引いた。その脇に立ち、数秒のあいだ、手の置き場がないように見えた。

「怒るのも無理はない」と言い、チャドの顔を見て言葉を切った。「わかった。もう言わない」

廊下から、助手の短い笑い声が聞こえた。別の誰かに向けられたものだった。

チャドはマイケルの写真を取り上げた。

「あなたの会に関わる気がなくても、これはもらえるんですか？」

「ああ」

「ヘルガに話を聞いても？」

「もちろん」

「あなたのために働くと決めなくても、またここへ来て、二人のことを聞いてもいいんですか？」

ピーターは椅子の背に指先を置いた。

「かまわない」

チャドは、その最後の返事を信じたかった。その願いは、誰かが自分を探っているという漠然とした脅威より厄介だった。この三年間、両親の名を口にすると、人の表情が変わるのを見てきた。ピーターは、最後の椅子を待つサンディや、新しい用紙に文句を言うマイケルの話ができた。生きていて、墜落だけで終わらないことを知っていた。

「あの旅行について確認できる情報を、今日中にください」

「送るよ」

「確かめてから、また来ます」

「わかった」

チャドは書類をしまい始めた。ピーターが空のフォルダーを渡した。チャドは大きな紙の間に写真を挟み、理事会のどんな書類よりも丁寧に、角をそろえた。

「温室では、まだ仕事をしているんですか？」と尋ねた。

「プロジェクトの一部は続いている。ずいぶん変わったがね」

「父はそこで、何をしていたんですか？」

「ヘルガに聞いてみるといい。私が間違えて話すのを聞くより、自分で話すほうが喜ぶだろう」

チャドが写真を覆う前、ピーターがそれを見つめる目には優しさがあった。二人が恋しいか、聞きたくなった。この部屋で口にするには、親密すぎる問いだった。あのメールのあとでは、なおさらだった。それでも、電話と財布を探すあいだ、その問いは歯の裏に引っかかったままだった。

ドアのところで、フォルダーから滑り落ちかけた紙をピーターが押さえた。

二人の指が、一瞬触れた。

「どうして、あなたは……」とチャドは言いかけた。

男は待った。

「僕を知っているみたいなんですか」

ピーターは紙を返した。

「ずっと前から、君がどう生きてきたか見てきた」

「聞いたのは、そういうことじゃありません」

遠くで、エレベーターの到着を知らせる音がした。ピーターは音のほうを見て、それから彼を見た。

「別の形で君の前に現れたかった」

「この形を選んだのは、あなたです」

男がまた同意する前に、チャドは出ていった。

下へ降りるあいだ、フォルダーを体に押しつけていた。仮の入館カードがポケットに引っかかった。苛立って引き抜くと、指に小さな赤い跡がついた。受付に返さなければならない。何階に車を停めたか、思い出さなければならない。簡単なことが重なるだけで、笑い出しそうになった。

外へ出ると、通りを渡ってカフェに入り、タワーに向かって座った。水とサンドイッチ、それから電話を充電できる席を頼んだ。店員が注文の品を運んでくると、上に皿を置かれないよう、急いでフォルダーをどけた。

イレーネから会議の結果が届いていた。提案は承認され、六か月後に見直すことになった。各チームは写しを閲覧でき、訪問は定期的には行われなくなる。チャドの意見は、引き続き添付資料に残されていた。

チャドはすべて読んだ。受け取ったと返信した。

それからジョアナに書いた。話し合いが終わった。食べてから帰る。運転しても大丈夫だ。

最後の一文を消した。午後には着くとだけ書き、送った。

三分後に返事が来た。わかった。

サンドイッチを半分食べた。包み紙が破れ、下からソースが垂れていたが、直す気にはなれなかった。皿と壁の間でフォルダーを開いた。

温室の中で、マイケルが笑っていた。

チャドは、汚れたシャツ、不ぞろいにまくられた袖、トレーの重みに耐える肩を見た。カメラの向こう側にいる人の声が聞こえるかのように、顔を近づけた。あの朝が、いつか一枚の紙に収まってしまうことを、父は知らなかった。

店員が、皿を下げてもいいか尋ねた。チャドは目を向けずにうなずいた。

彼女が立ち去ってから、まだ腹が減っていることに気づいた。

写真をしまい、ポケットからカードを出して、研究所に電話をかけた。

無料試し読み版ここまで ——『Green Veil 第一巻 秘められた遺産』序章・第一章・第二章より

試し読みの終わり

第三章は、ここから始まる。

写真をしまい、ポケットから取り出したカードの番号へ――チャドが研究所へ電話をかけた瞬間、十四世紀と二〇〇九年を繋ぐ扉が開き始めます。

日本語版 第一巻の公開通知を受け取る

https://greenveil-zeta.vercel.app/?lang=ja#pedido

公式サイトよりメールアドレスまたは Instagram @ をご登録いただくと、全編公開時にいち早く個別にご案内いたします。

Instagram @green_veil_universe · YouTube @GreenVeilUniverse · growxco@gmail.com